

2020-10-1
No.1057 500円

思想運動

安倍退陣、新政権誕生をどう捉えるか	2~3面
辺野古新基地建設と菅政権 (高良鉄美)	4面
アベの「辞め逃げ」を許すな (木村真)	5面
愛知朝鮮高校無償化裁判最高裁決定糾弾	5面
コロナ現象を労働から見る (在間秀和)	6面
「国鉄闘争から引き継ぐもの」討論集会	6面
北の大地に核のゴミはいらない	11面



辺野古の海に土砂を投入するな！
沖縄県独自の緊急事態宣言が解除されたので、九月七日から約一か月ぶりにキャンプ・シュワブゲート前の座り込みが再開された。写真は九月十一日のゲート前行動(撮影：枝川敏夫 関連記事四画)

ブルジョワ独裁の「権力継承劇」に鉾をおさめるな 合言葉は「Them & Us」だ！

八月二十八日、安倍晋三はみずから首相の座を降りることを表明し、九月十六日、その跡を内閣官房長官の菅義偉が引き継ぎ首相の座に就いた。

仕組まれた辞任劇

われわれは、自民党の総裁選も含めて周到に準備されたこの「権力継承劇」を連日否応なく目の当たりにさせられてきた。なぜ「劇」と言うのか？ そつでなければ、大名行列のように黒塗りの車列をひきいて安倍が慶応病院にのりこむはずがなかつた。ブルジョワ社会において一国の首班の健康問題は機密中の機密に属する。それを、マスメディアも事前に配置して病院への出入現場を撮影させるのを「劇(シヨウ)」と言わずして、なんと言うのか！

こうして「辞任劇」に対して、ブルジョワ議会の野党議員たちはお定まりの「フエアプレイ」精神を発揮して、本心かどうかは別にして、まずは安倍の病状に対する「お見舞い」の言葉を述べ、さもそれが徳のある人としての良識であるといわんばかりに、それを釣られて市井の民までが「安倍さん、かわいそう」「安倍さん、よくがんばったね」と言いたす始末。こうして、ブルジョワ独裁の「継承劇」は波乱なく終了し、支持部が方針を決定し、組合員がこれに心算を起し、組織された労働者はこうした力を発揮する。たかが署名とつなげられ、われわれはこの夏、この署名活動の実践をうけて、コロナ禍における人民の無惨な姿である。こんな「フエアプレイ」精神など天にも食われてしまえ！と

心底わたしは思つた。
人民の変化の兆し

われわれは、ひとり高みに立つてこんなことを言っているのではない。壊憲NO！ 96条改憲反対連絡会議の仲間とともにわれわれが東京・新宿駅前でPCR検査要求署名に取り組んだ七月三十日の時点では、九〇秒に一人の割合で、若い若きも男女の別もなく、道行くひとが足を止めて手を握って署名に加わり、口々に安倍政権の人命軽視、資本家防衛の経済優先政策を批判する姿があった。そののちから彼女らの不平や不満の口物のなかには原則的にはあれ、ブルジョワ・イデオロギーに絡めとられた「国民意識」を突き破って人民意識に生成転化する契機があったのである。

百鬼夜行の世界

百鬼夜行の世界。この度の「敵基地攻撃能力」の保有は一つながりのものだ。菅新政権が引き継ぐこの攻撃をわれわれはけつして許してはならない。

問題はどこにある

繰り返すが、われわれはこの夏、「国民」意識を突き破って人民意識に生成転化する契機を垣間見、学んだ。そして、その人民内部の変化の兆しは、支配階級をして「権力継承劇」をとらざるを得ないところまですすめた。それは、辺野古新基地建設反対の闘いに示されているように、決して屈せず日夜つづけてきた全国無数の闘いがあった。それはその現段階の到達点であつたともいえる。だが、その闘いの到達点が、「安倍辞任劇」の発動によって一夜にしてひっくり返される事態も、われわれは目撃した。

これは、問題はどこにあるのか？ それは、人民のこのような自然発生的な不平や不満を物質的な力にまとめ上げ、全国的な政治闘争を起していく政治指導部がこの国に不在であることだ。次に、こうしたこの政治指導部を形成できた菅が、いまその跡を継いだ。菅もまた、労働者・人民の無数の生き血をあびて血まみれなのだ。われわれは、無念にも斃れていった無数の屍を前に、階級的復讐心をもちて報復を誓う。

してカウスキー主義(すなわち、第二インターナショナル路線)に落ち込んでいた。われわれはこうした路線ではなく、しっかりとした階級闘争・国家観にたつた活動家の集団が労働運動と結びついて大衆闘争が形成されること不可欠と考える。それには現在の党指導部の方針に対して批判意識をもつ日本共産党員とも課題を共有し活動をもつことも可能だし、じつ協力しあう覚悟もいる。かく言つたわれわれも、集団結成五年を経たなおその任を果しているとは言えない。しかし、ソ連邦の倒壊から三〇年になろうとしている現在も、社会主義、インターナショナルリズム、労働運動強化、この三つの旗幟はいまでも高く掲げて活動している。

いま、安倍の去つた跡には人民の血のりと怨嗟がこびりついている。近畿財務局の赤木俊夫氏の無念の自死しかり。コロナ禍のさなか、PCR検査を拒まれ自宅待機を余儀なくされたあけく休調に異変を覚え病院に向かう途中の道端で野垂れ死にした埼玉の高齢の男性しかり。はつきり言うが、かれらは安倍によって殺されたのだ。

血まみれの安倍は政権の座から降りたが、安倍政治を木で鼻をくくつたような態度で平然と補佐して人民殺しを執行してきた菅が、いまその跡を継いだ。菅もまた、労働者・人民の無数の生き血をあびて血まみれなのだ。われわれは、無念にも斃れていった無数の屍を前に、階級的復讐心をもちて報復を誓う。

この「権力継承劇」が潰瘍なくすすめられているのをみて、九月十一日「ミサイル阻止に関する安全保障政策の新たな方針」と名付けた首相談話を発表し、「敵基地攻撃能力」の保有を次期政権に託した。それは中国の国際的な台頭を見越しての日米合作のあらたな対中策として対朝鮮攻撃にほかならない。二〇二四年の集団的自衛権行使容認の閣議決定から翌一五年の安保法制の国会通過強行、そして

この度の「敵基地攻撃能力」の保有は一つながりのものだ。菅新政権が引き継ぐこの攻撃をわれわれはけつして許してはならない。

繰り返すが、われわれはこの夏、「国民」意識を突き破って人民意識に生成転化する契機を垣間見、学んだ。そして、その人民内部の変化の兆しは、支配階級をして「権力継承劇」をとらざるを得ないところまですすめた。それは、辺野古新基地建設反対の闘いに示されているように、決して屈せず日夜つづけてきた全国無数の闘いがあった。それはその現段階の到達点であつたともいえる。だが、その闘いの到達点が、「安倍辞任劇」の発動によって一夜にしてひっくり返される事態も、われわれは目撃した。

これは、問題はどこにあるのか？ それは、人民のこのような自然発生的な不平や不満を物質的な力にまとめ上げ、全国的な政治闘争を起していく政治指導部がこの国に不在であることだ。次に、こうしたこの政治指導部を形成できた菅が、いまその跡を継いだ。菅もまた、労働者・人民の無数の生き血をあびて血まみれなのだ。われわれは、無念にも斃れていった無数の屍を前に、階級的復讐心をもちて報復を誓う。

してカウスキー主義(すなわち、第二インターナショナル路線)に落ち込んでいた。われわれはこうした路線ではなく、しっかりとした階級闘争・国家観にたつた活動家の集団が労働運動と結びついて大衆闘争が形成されること不可欠と考える。それには現在の党指導部の方針に対して批判意識をもつ日本共産党員とも課題を共有し活動をもつことも可能だし、じつ協力しあう覚悟もいる。かく言つたわれわれも、集団結成五年を経たなおその任を果しているとは言えない。しかし、ソ連邦の倒壊から三〇年になろうとしている現在も、社会主義、インターナショナルリズム、労働運動強化、この三つの旗幟はいまでも高く掲げて活動している。

いま、安倍の去つた跡には人民の血のりと怨嗟がこびりついている。近畿財務局の赤木俊夫氏の無念の自死しかり。コロナ禍のさなか、PCR検査を拒まれ自宅待機を余儀なくされたあけく休調に異変を覚え病院に向かう途中の道端で野垂れ死にした埼玉の高齢の男性しかり。はつきり言うが、かれらは安倍によって殺されたのだ。

血まみれの安倍は政権の座から降りたが、安倍政治を木で鼻をくくつたような態度で平然と補佐して人民殺しを執行してきた菅が、いまその跡を継いだ。菅もまた、労働者・人民の無数の生き血をあびて血まみれなのだ。われわれは、無念にも斃れていった無数の屍を前に、階級的復讐心をもちて報復を誓う。

この「権力継承劇」が潰瘍なくすすめられているのをみて、九月十一日「ミサイル阻止に関する安全保障政策の新たな方針」と名付けた首相談話を発表し、「敵基地攻撃能力」の保有を次期政権に託した。それは中国の国際的な台頭を見越しての日米合作のあらたな対中策として対朝鮮攻撃にほかならない。二〇二四年の集団的自衛権行使容認の閣議決定から翌一五年の安保法制の国会通過強行、そして

この度の「敵基地攻撃能力」の保有は一つながりのものだ。菅新政権が引き継ぐこの攻撃をわれわれはけつして許してはならない。

繰り返すが、われわれはこの夏、「国民」意識を突き破って人民意識に生成転化する契機を垣間見、学んだ。そして、その人民内部の変化の兆しは、支配階級をして「権力継承劇」をとらざるを得ないところまですすめた。それは、辺野古新基地建設反対の闘いに示されているように、決して屈せず日夜つづけてきた全国無数の闘いがあった。それはその現段階の到達点であつたともいえる。だが、その闘いの到達点が、「安倍辞任劇」の発動によって一夜にしてひっくり返される事態も、われわれは目撃した。

これは、問題はどこにあるのか？ それは、人民のこのような自然発生的な不平や不満を物質的な力にまとめ上げ、全国的な政治闘争を起していく政治指導部がこの国に不在であることだ。次に、こうしたこの政治指導部を形成できた菅が、いまその跡を継いだ。菅もまた、労働者・人民の無数の生き血をあびて血まみれなのだ。われわれは、無念にも斃れていった無数の屍を前に、階級的復讐心をもちて報復を誓う。

してカウスキー主義(すなわち、第二インターナショナル路線)に落ち込んでいた。われわれはこうした路線ではなく、しっかりとした階級闘争・国家観にたつた活動家の集団が労働運動と結びついて大衆闘争が形成されること不可欠と考える。それには現在の党指導部の方針に対して批判意識をもつ日本共産党員とも課題を共有し活動をもつことも可能だし、じつ協力しあう覚悟もいる。かく言つたわれわれも、集団結成五年を経たなおその任を果しているとは言えない。しかし、ソ連邦の倒壊から三〇年になろうとしている現在も、社会主義、インターナショナルリズム、労働運動強化、この三つの旗幟はいまでも高く掲げて活動している。